

【資料 1 - 5】

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する
地区意見交換会（下北地区）における主な意見
《 整理案 》

令和3年2月3日

目次

1	下北地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み.....	1
2	全日制課程の学校規模・配置に関する意見.....	2
(1)	重点校・拠点校・地域校の配置等.....	2
(2)	委員の意見に基づく学校配置シミュレーション.....	3
ア	全ての学校を配置する場合.....	3
イ	大湊高校とむつ工業高校を統合して新設校を配置する場合.....	5
ウ	第3期実施計画において、むつ市内の3校を統合して新設校を配置する場合.....	7
(3)	その他の意見.....	9
3	定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見.....	9
4	多様な教育制度に関する意見.....	10
(1)	全国からの生徒募集.....	10
(2)	その他の教育制度.....	12
5	その他.....	12
【参考1】	委員名簿（下北地区）.....	13
【参考2】	オブザーバー名簿（下北地区）.....	14
【参考3】	地区意見交換会の開催状況（下北地区）.....	14

1 下北地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み

		東青	西北	中南	上北	下北	三八	県計
中学校卒業生数	R4	2,492人	985人	2,112人	1,583人	578人	2,418人	10,168人
	R9 (対R4)	2,216人 (△276)	824人 (△161)	1,935人 (△177)	1,486人 (△97)	464人 (△114)	2,262人 (△156)	9,187人 (△981)
	R14 (対R4)	1,942人 (△550)	752人 (△233)	1,727人 (△385)	1,413人 (△170)	405人 (△173)	2,020人 (△398)	8,259人 (△1,909)
募集学級数	R4	46c1	19c1	39c1	33～34c1	13～14c1	39c1	189～191c1
	R9 (対R4)	42c1 (△4)	16c1 (△3)	36c1 (△3)	30～31c1 (△3)	10～11c1 (△3)	36c1 (△3)	170～172c1 (△19)
	R14 (対R4)	37c1 (△9)	14c1 (△5)	33c1 (△6)	28～29c1 (△5)	9～10c1 (△4)	32c1 (△7)	153～155c1 (△36)

※ 中学校卒業生数は、令和2年5月1日現在の児童生徒数を基に高等学校教育改革推進室において各年3月の生徒数を推計したものであり、変動が生じる可能性がある。

※ 募集学級数は、各年度の全日制課程における見込み。

※ 募集学級数は、地域校の配置に関して基本方針に基づき入学状況等により対応することから、幅を設けて示している。

※ 令和14年度の中学校卒業生数等については、第2期実施計画の学校規模・配置を検討するための参考として示している。

■ 令和4年度時点の学校配置状況

学校・学科		年度等	第1期実施計画(H30～R4)		第2期実施計画(R5～R9)		第3期実施計画(R10～R14)		備考
			期間内増減	R4学級数	期間内増減	R9学級数	期間内増減	R14学級数	
重点校	田名部高校	普通	1	5					R1英語科を普通科に改編
		英語	△1	0	—	—	—	—	
	大湊高校	総合	△1	4					
	川内校舎	普通	△1	0	—	—	—	—	R1募集停止 R2年度未閉校
地域校	大間高校	普通	0～△1	1～2					
	むつ工業高校	工業	△1	3					
計			△3～△4	13～14	△3	10～11	△1	9～10	

※大間高校については、基本方針に定める基準により対応することから、幅を設けて示している。

2 全日制課程の学校規模・配置に関する意見

(1) 重点校・拠点校・地域校の配置等

① 重点校・拠点校

- 重点校については、第1期実施計画の配置を維持することが望ましい。(第1回・同様の意見あり)
- 重点校及び拠点校における取組や、各高校において身に付けられる力、取得できる資格、就職先等について情報提供されることが多くなった。(第1回)

② 地域校

- 大間高校が地域校という位置付けが良い。(第1回・同様の意見あり)
- 大間高校は、地域の活性化にとって非常に重要であり地域校として存続してほしい。地域校の活性化に向けた対応について、将来にわたって地域に学校を残すための方策を県教育委員会も真剣に考えてほしい。(第1回)
- 基本方針では、農業科の拠点校に関する部分で寄宿舍の活用について触れられているが、地域校においても寄宿舍の活用を検討してほしい。(第1回)
- 大間高校で生徒たちが充実した高校生活を送っていることをアピールすることが、入学者数の増加にもつながっていくため、県教育委員会でも各校における特長を積極的に広報してほしい。(第1回)
- 大間高校については、地域校として配置を継続すべきである。地域との連携による魅力的な学校づくりを更に進め、今後も入学者数を確保してほしい。(第1回)
- 大間高校に限らず、どの地域校も現状のままでは中長期的に見ると厳しい状況になるので、特色ある教育に特化した高校として存続するか、高校を統合するかの2択になる。(第1回)
- 今後更に少子化が加速することにより、令和8～9年度頃には地域校に関する基準を見直す必要が生じる可能性がある。地理的な問題から高校教育を受ける機会を失うことを最も心配している。高校の小規模化によるマイナス面はあるが、学校が存在するか否かの差は大きい。(第1回)
- 地域校の学級減や募集停止の基準については、地域の実情も考えて見直しを検討していただきたい。仮に大間高校が募集停止となり、むつ市や他地区の高校に進学した場合、その土地に就職する生徒が出てくると思う。そうなれば北通り地域から人がいなくなり、地域を維持できなくなる。(第2回)
- 大間高校については是非残してほしい。10年後や20年後の高校教育がどのようになるか見通しがつかない難しい状況にある中、高校に通学できるかどうか、高校教育を受けることができるかどうかを最も切実な問題だと思う。(第2回)
- 大間高校の募集停止を考える場合は、通学が困難となる生徒への具体的な支援について見通しを示していただきたい。(第2回意見等記入票)

(2) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション

ア 全ての学校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画
	R4 (期間内最終年度)	R5~R9		R10~14
重点校	田名部 5学級	△2学級 →	田名部 ○学級	△1学級
連携校	大湊 4学級		大湊 ○学級	
	むつ工業 3学級		むつ工業 ○学級	
小計	12学級	△2学級 →	10学級	
地域校	大間 2学級		大間 2学級	
合計	14学級	△2学級 →	12学級	11学級

※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。

※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。

※ 地域校については、基本方針に基づき入学状況等により対応することから、地域校を配置する場合は第2期実施計画期間の期間内増減数を△3学級から△2学級としている。

① シミュレーションの基となった意見

○ 中学生が多く的高校から進学先を選択できるという多様性の確保の観点から、現時点では学級減で対応してほしい。(第1回)

② 期待される効果等

- 学校規模が小さくなることで、かえって学習環境の質を確保しやすい状況が生まれてくることも理解してほしい。(第1回)
- 下北地区では、高校を統合した場合、通学への影響が顕著であると思うので、学級減で対応してほしい。(第1回)
- これ以上、下北地区から高校がなくなってしまうと、中学校から高校に進学する際に生徒が他地区に流出してしまうことも考えられる。下北地区に残って、下北地区を好きになってもらい、将来的に下北地区に帰ってきて働いてほしいという思いがあるため、学級減で対応し可能な限り高校を存続させる方向で検討してほしい。(第1回)
- 下北地区は、大間高校を除くとむつ市内に3校の高校がある。進学校の田名部高校、職業教育を主とする専門高校のむつ工業高校、多様な選択科目を有する総合学科の大湊高校の3校それぞれが充実した教育環境となっている。また、各地域における通学事情が異なるため、進路の多様性は欠如していることもあるが、高校教育を受ける機会は確保されている。(第1回意見等記入票)
- 田名部高校、大湊高校、むつ工業高校には、それぞれの役割があり非常に重要である。下北地区は、バランスの取れた高校配置となっており、現状の配置を継続することが大事という思いがある。(第2回)
- 高校が一旦廃止になれば、将来的に再度新設されることはあり得ないため将来の子どもたちのために、何とかしてむつ市内の3校と地域校である大間高校は残すべき。(第2回)
- 中学生の進路の選択肢が狭められない。(第2回意見等記入票)
- 各校が存続することにより、中学生が学校の特色により進学先を選択できる。(第2回意見等記入票)

③ 更に検討を要する課題等

- 学校規模に応じて開設科目数が大きく変わることを踏まえるとともに、生徒が希望する部活動に取り組める環境を準備するためには、学校規模を維持していくことが非常に大きなポイントである。(第1回)
- 学級減の対象を検討する際には、第1次進路志望倍率等を考慮しなければ、希望する学校に行けない子どもが増えるという点を視野に入れて検討を進めた方がよい。(第1回)
- 学級数、教員数の減少が開設教科・科目や学科・コースの減少につながる。また、令和14年度には小規模校が増える。(第2回意見等記入票)
- 重点校の学校規模を含め、どの学校の学級減を行うのかが大きな課題となる。(第2回意見等記入票)
- 各校の質の低下が予想され、特に大湊高校は3学級規模となることで教員数が減少し、総合学科としての特長が薄れる課題が考えられる。(第2回意見等記入票)

イ 大湊高校とむつ工業高校を統合して新設校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画
	R4 (期間内最終年度)	R5~R9		R10~14
重点校	田名部 5学級	△2学級 →	田名部 ○学級	△1学級
連携校	大湊 4学級 むつ工業 3学級		新設校 総合学科○学級 工業科○学級 ○学級	
小計	12学級	△2学級 →	10学級	
地域校	大間 2学級		大間 2学級	
合計	14学級	△2学級 →	12学級	11学級

- ※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。
- ※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。
- ※ 地域校については、基本方針に基づき入学状況等により対応することから、地域校を配置する場合は第2期実施計画期間の期間内増減数を△3学級から△2学級としている。

① シミュレーションの基となった意見

- 小規模校にもメリットがあるとの意見もあったが、デメリットがはるかに大きい
ため統合に踏み切る時期であり、学校規模により科目開設数が大きく変わること
や、生徒が希望する部活動に取り組める環境を踏まえれば、現実的な選択肢とし
て、大湊高校とむつ工業高校の統合が1つのアイデアになる。(第1回)

② 期待される効果等

- 学校規模に応じて開設科目数が大きく変わることを踏まえるとともに、生徒が希望する部活動に取り組める環境を準備するためには、学校規模を維持していくことが非常に大きなポイントである。(第1回)
- 入学する生徒は充実した高校生活について大きな期待感を持って進学してくる。このため、下北地区の高校が、他地区の高校よりも進学したい高校であるかどうか、魅力的な高校であるかどうかを肝心であり、年々小規模化していくのが見えている高校と、他地区に引けを取らない、またはそれ以上の学校規模の高校のどちらが良いのかということである。(第2回)
- 統合のメリットとして教員数の増加等が挙げられるが、部活動が大きい意味を持っている。ある程度の学校規模を維持することで、生徒たちが希望するスポーツに取り組むことができる環境を提供してあげたい。(第2回)
- 子どもたちが魅力を感じ、教育を受けたいと強く思える学校であれば、新設校の意義がある。(第2回)
- 連携校の統合により学校規模が大きくなることで教員数が増加し、教育活動が活性化するのではないか。(第2回意見等記入票)
- 下北地区において、統合は避けて通れない。統合により5学級規模となることで、教員数の確保、必要な教科・科目の維持、部活動の活性化が見込まれ、子どもたちのニーズに応えられる。(第2回意見等記入票)

③ 更に検討を要する課題等

- 学校規模が小さくなることで、かえって学習環境の質を確保しやすい状況が生まれてくることも理解してほしい。(第1回)
- 下北地区では、高校を統合した場合、通学への影響が顕著である。(第1回)
- これ以上、下北地区から高校がなくなってしまうと、中学校から高校に進学する際に生徒が他地区に流出してしまう。(第1回)
- 重点校の学校規模をどのように考えていくか。(第2回意見等記入票)
- 大湊高校とむつ工業高校を統合することで相乗効果を得られるか疑問である。学校規模が大きくなっても、両校の良さが弱まる懸念がある。(第2回意見等記入票)
- 新設校の設置場所、通学路線、下宿先の確保等が課題である。(第2回意見等記入票)

ウ 第3期実施計画において、むつ市内の3校を統合して新設校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画	
	R4 (期間内最終年度)	R5~R9		R10~14	
重点校 連携校	田名部 5学級 大湊 4学級 むつ工業 3学級	Δ2学級 →	田名部 ○学級 大湊 ○学級 むつ工業 ○学級	Δ1学級 →	新設校 普通科○学級 総合学科○学級 工業科○学級 9学級
小計	12学級	Δ2学級 →	10学級	Δ1学級 →	9学級
地域校	大間 2学級		大間 2学級		大間 2学級
合計	14学級	Δ2学級 →	12学級	Δ1学級 →	11学級

- ※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。
- ※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。
- ※ 地域校については、基本方針に基づき入学状況等により対応することから、地域校を配置する場合は第2期実施計画期間の期間内増減数をΔ3学級からΔ2学級としている。

① シミュレーションの基となった意見

- 将来的に下北地区全体で募集学級数が10学級を切る状況になれば、1つの高校しか残らないことも想定される。その場合は、地区全域から通学できるよう手立てを講じた上で、全てのニーズに対応できる高校を配置し、人的・物的資源を集中させるという考え方もあるのではないか。(第1回)

② 期待される効果等

- 学校規模に応じて開設科目数が大きく変わるとともに、生徒が希望する部活動に取り組める環境を準備するためには、学校規模を維持していくことが非常に大きなポイントである。(第1回)
- 生徒数が減っていく中では、仕方がないという思いがある。(第2回)
- 大規模校となることで、各学科の生徒が切磋琢磨する気風が高まる。(第2回意見等記入票)
- 田名部高校が重点校としての役割を果たすという視点から、将来的にはむつ市内3校の統合も視野に入れる必要があり、チーム下北として文武両道の高校となる可能性を秘めている。(第2回意見等記入票)

③ 更に検討を要する課題等

- 学校規模が小さくなることで、かえって学習環境の質を確保しやすい状況が生まれてくることも理解してほしい。(第1回)
- 下北地区では、高校を統合した場合、通学への影響が顕著である。(第1回)
- これ以上、下北地区から高校がなくなってしまうと、中学校から高校に進学する際に生徒が他地区に流出してしまう。(第1回)
- 大学のようにキャンパス制を採用して現存の校舎を使用することも可能なのではないか。少子化で統合は避けられない思いながらも、子どもたちには多様な選択肢の中で高校を選んでほしいという思いはある。第3期実施計画期間においては、高校を選ぶというよりも学科を選ぶという進路選択にもなり得る。(第2回)
- 既存の校舎を使用し寄せ集めで新設校と言われても、子どもたちは魅力を感じない。高校は未来に希望を持って子どもたちが学べる場でなければならないと強く感じている。新設校を設置するのであれば、校舎建設や教職員の配置等についても考えていく必要があるのではないか。(第2回)
- むつ市内に1校のみ配置されることとなり、学力の幅が大きくなることが見込まれる。(第2回意見等記入票)
- 9学級規模の大規模校になるメリットよりも、下北地区全域からの通学の負担等のデメリットの方が大きい。(第2回意見等記入票)

(3) その他の意見

<充実した教育環境の整備>

- 下北地区では、学校規模の標準に満たない高校も配置されているが、他の地域とのバランスも考慮して弾力的に取り扱っても良い。(第1回)

<学科等>

- 大間高校に林業科など、地域の環境や産業に結びつく学科が設置されても良い。(第1回)

<その他>

- 企業が必要とするのは即戦力であり、むつ工業高校では生徒に多くの資格を取得させ、資格を持った即戦力として卒業させていると聞いている。また、高校における地域を愛する教育が薄いように感じるが、企業としては地域を愛する即戦力を必要としている。(第1回)
- 現在のコロナ禍により将来を見通すことが困難な時代であり、それに対応できる高校づくりをしてほしい。また、文部科学省でも、全ての高校でSDGsの実現に向けた教育を進めるよう要請していることを踏まえ、持続可能な地域づくりを実現するために、地域課題を自分たちで解決していくという目標を大きく打ち出してほしい。(第1回)
- これだけ生徒が地域外に流出すると地域が縮小していくため、非常に危機感を抱いており、各家庭と自治体が今後の方向性等について、話し合う機会が必要である。(第2回)
- 令和3年度の文部科学省の概算要求では、COREハイスクール・ネットワーク構想が提示されているため、県教育委員会においても、この構想を踏まえた取組を進めていただきたい。これから高校が存続するための最大のポイントは、やはりICTの活用である。(第2回)
- 何よりも子どものニーズに応える必要があるため、中学生に対して具体的な学校規模・配置等に関するアンケートを実施しても良い。(第2回意見等記入票)

3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見

- 定時制課程・通信制課程については、現状の配置を継続してほしい。(第1回・同様の意見あり)

【参考】第1期実施計画における配置状況

定時制課程	田名部高校(普通科・1学級)
-------	----------------

4 多様な教育制度に関する意見

(1) 全国からの生徒募集

① 導入の必要性等

- 生徒数の減少は全国的なものであり、全国からの生徒募集も全国的に増加していくものとする。 (第2回意見等記入票)

② 導入範囲・方法

- 下宿や寮を確保しなければ、他県の生徒は集まらない。近年、むつ市内の下宿施設の数が増えている点も考慮しながら検討してほしい。 (第1回)
- 他県の生徒や保護者に入学を希望してもらうためには、魅力ある高校でなければならない。このため、大間高校の校地内に寄宿舎を建設し、全寮制のような高校とした上で、高速通信回線を整備することにより、本県のICT教育における先進校を目指すというのではないかと。当然、関係町村が思い切った援助を提示することが重要であり、県教育委員会としても、地域校の活性化に向け、学校と地域等が一体となった検討を是非促してほしい。 (第1回、第2回意見等記入票)
- 他県の事例を見ると、地域における支援として、自治体による寮の設置などが多いが、むつ工業高校の場合は民間企業との関係も深いので、企業からの支援を受けながら同校に導入することも考えられるのではないかと。 (第1回)
- 大間高校は、北通り地域にとって将来にわたって必要な高校であるが、北通り地域だけでは、生徒数の確保が困難になることは明白であるため、大間高校への導入を実現してほしい。 (第1回)
- 大間町のマグロ、佐井村のウニ、風間浦村のアンコウに加え、大間町と台湾との交流や、風間浦村と京都府の同志社中学校との交流など、地域のあらゆるリソースを大間高校で活用してほしい。 (第1回)
- ICTを活用した教育活動や、SDGsに関する取組を進めるためには、現在採用されている教員のみでは難しいため、教員の全国公募、大学や産業界との連携等が必要である。大間高校は好事例を作れるような気がするので、真剣に取り組んでほしい。 (第1回)
- 全国から生徒を集めるためには、募集する前に、魅力ある教育活動が求められるので、北通り3町村の教育委員会として、今後、様々な形で支援しながら大間高校の充実を図っていききたい。 (第1回)
- 大間高校の魅力化のため、3町村で大間高校とも話し合いながら、小・中学校の教育活動を高校の教育につなげていけるような地域ぐるみの取組を進めていくこととしている。全国から生徒を募集したときに、それに応え得る学校を大間高校や県教育委員会と連携しながら作り上げていくことが大事である。 (第2回)
- 10年後には、地域の特色を生かした課題解決型学習により、思考力・判断力・表現力を重視した教育活動が更に進められるため、全国的・全県的な視点での取組は重要であるが、他県からの入学を希望する生徒は少数である。 (第2回意見等記入票)
- 百石高校の食物調理科において、青森県のみならず東北地方の特産物を活用した教育活動を実施することにより、東北各県からの入学が期待できる。 (第2回意見等記入票)

③ 県全体の意見まとめ（参考）

■ 導入範囲・具体的な高校例・効果等

導入範囲	具体的な高校例	効果等
特色ある教育活動を行っている高校（学科）	弘前南 柏木農業 黒石（情報デザイン科） 百石（食物調理科） 八戸西（スポーツ科学科） 八戸東（表現科） 名久井農業	○ 特色ある学科や研究活動等の実施により、県外からの入学者が期待できる。
職業教育を主とする専門学科を有する高校	農業科、水産科、工業科、商業科、家庭科、看護科を有する高校	○ 本県の地域資源等を活用した特色ある教育活動を実施しており、入学者が見込まれる。
職業教育を主とする専門学科を有する高校のうち、寄宿舎を有する高校	五所川原農林 三本木農業 名久井農業 八戸水産	○ 県内生徒の使用に支障を与えずに県外生徒が活用できれば、生活環境が確保される。
地域校の配置の考え方に該当する高校	鱒ヶ沢 六ヶ所 大間 三戸	○ 入学者数の確保につながることを期待できる。
他県から注目度の高い部活動を有する高校	浪岡（バドミントン部） 三本木農業（相撲部） 八戸工業（アイスホッケー部） 八戸商業（アイスホッケー部）	○ スポーツで生徒を育てることも大きな特色であり、入学者が見込まれる。

■ 更に検討を要する課題等

区分	更に検討を要する課題等
募集人数等	○ 県内生徒のニーズや学習機会を確保するため、県外生徒の定員の制限（募集枠の設定等）を考える必要がある。 ○ 単年度留学などの制度を導入してはどうか。
生活環境等	○ 県外生徒が安心して学校生活を送れるよう、生活環境を確保する必要があり、宿泊施設や生活面の支援を市町村がどれだけバックアップできるかが課題となる。 ○ 導入する場合、県としても支援（ホームページやパンフレットによる広報等）が必要である。 ○ 生活環境を確保するため、「空き家バンク」等の活用やホテル・宿泊施設等の活用も考えられる。 ○ 地域によっては、下宿施設数が減少している状況がある。
高校の魅力づくり	○ 県外生徒を呼び込むためには、魅力ある教育活動が求められる。他県の事例等も参考にしながら検討する必要がある。 ○ 特色ある学科の設置等を検討してはどうか。 ○ 地域資源等を活用して魅力をアピールすることが考えられる。 ○ 県外生徒の受入に向け、高校を含めた地域全体で考えられるよう話し合いの場があっても良い。

(2) その他の教育制度

意見なし

5 その他

<生徒の通学>

- 全ての高校でとは言わないが、寄宿舎を設置するなどにより、子どもが通学の心配をせず、高校の中で生活する時間を確保できるような環境整備も必要である。(第1回)
- 将来的には、大間高校が募集停止になるかもしれないが、大間町等の生徒がむつ市内の高校に入学し部活動に加入する場合は下宿が必要となるため、経済的な負担に対する支援も検討してほしい。(第1回)
- 通学に対して具体的にどのような支援が可能なのか。現在も地域によっては距離的・経済的な負担により進学を断念せざるを得ない子どもがいるが、今後さらに難しくなる可能性がある。(第1回)
- 下北地区において一番必要な対策は、スクールバスの運行と下宿先の確保である。全国からの生徒募集よりも通学支援等の整備が急務である。(第1回意見等記入票)

<その他>

- 大学では、一人一人が課題に関するプレゼンテーションを行い、友人や教員が良い点や改善点を話し合うなど、お互いを認め合う場を設定しながらオンライン授業が進められており、高校においても、定時制課程及び通信制課程における教育活動や、不登校の生徒に対して応用できるのではないかと。実際の体験とオンライン授業を使い分けながら単位取得を認めることにより、高校への通学に関する課題も少しは解決できる。(第1回)

【参考1】委員名簿（下北地区）

（敬称略）

区分	所属等	委員名	備考
市町村教育委員会	むつ市教育委員会 教育長	氏 家 剛	
	大間町教育委員会 教育長	佐 藤 桂 一	
	東通村教育委員会 教育長	奥 島 涼 子	
	風間浦村教育委員会 教育長	越 膳 泰 彦	
	佐井村教育委員会 教育長	内 山 祐 三	
P T A	むつ市連合P T A 会長 （むつ市立田名部中学校P T A 監事）	大 見 竜 人	
	下北郡連合P T A 会長 （大間町立大間中学校P T A 会長）	伊 藤 亮	
	青森県高等学校P T A連合会 下北むつ地区協議会 会長 （県立田名部高等学校P T A 会長）	三條目 靖 彦	
産 業 界	むつ商工会議所青年部 直前会長	佐 藤 俊 介	
	むつ・下北地区商工会青年部連絡協議会 会長 （むつ市川内町商工会青年部 部長）	濱 中 亮 輔	
小 中 学 校 長 会	下北小学校長会 事務局長 （むつ市立二枚橋小学校 校長）	中 居 春 雄	
	下北地方中学校長会 監事 （東通村立東通中学校 校長）	岸 健一郎	
	青森県私立中学高等学校長協会 副会長 （八戸学院野辺地西高等学校 校長）	橋 場 保 人	
	元県立田名部高等学校 校長	長者久保 雅 仁	進行役
	元県立大間高等学校 校長	安 達 健 夫	

【参考2】オブザーバー名簿（下北地区）

（敬称略）

所 属 等	オブザーバー名	備 考
県立田名部高等学校 校長	今 井 啓 之	
県立大湊高等学校 校長	下川原 堅 藏	
県立大間高等学校 校長	森 田 勝 博	
県立むつ工業高等学校 校長	山 崎 康 浩	
県立むつ養護学校 校長	湯 田 秀 樹	

【参考3】地区意見交換会の開催状況（下北地区）

回	年月日	内 容
1	令和2年 9月15日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高等学校教育改革に係る経緯・現状等 ○ 学校規模・配置の検討 ○ 多様な教育制度等について
2	令和2年12月18日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地区意見交換会委員の意見に基づく学校配置シミュレーションにおいて想定される効果・課題等 ○ 全国からの生徒募集の導入範囲と効果・課題等
3	令和3年 2月 3日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地区意見交換会における主な意見《整理案》